

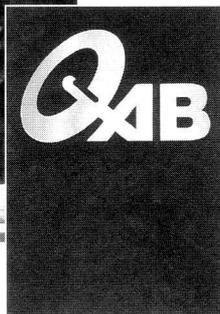
日本初1局2波のテレビ放送局

～琉球朝日放送の10年～

平田 嗣弘 (RBC・QAB)



琉球朝日放送社長 平田 嗣弘氏



〈Q〉は、時代に対するQABの真剣で的確な「まなごし」を意味するとともに、ちょうどパラボラ・アンテナのように、休むことなく情報を発信し続けるQABの活力あふれる姿勢を表しています

みん
な
の
話
ら
う
民
放
史

題字 中川 順

ことの発端は1986(昭和61)年、郵政省(当時)は地域によって放送の情報格差があつてはならないとして、「民放テレビの全国あまねく4局化」を打ち出しました。

琉球朝日放送(QAB)創立の動きは、それ以降に出てきたものです。1994(平成6)年6月10日に創立総会が開催され、翌95年6月10日に開局しました。

その間、いろいろなことがありました。

共倒れを防ぐ危機感が生んだ
1局2波体制

なぜ、新たな形態(1局2波)の放送局を立ち上げることになつたか、という一番の理由は、沖縄のようなマーケットの小さいところで3局、4局も作つたら営業が成り立たない、という経営シミュレーションがあつたからです。

新局も既存局も共倒れになつてしまふ。琉球放送の社員が、当時200人近くいましたが、広告収入がこれまでの2等分(民放2局)から3、4等分になり、これでは経営が成り立たないという危機感がありました。これで必死になり

ました。

1局2波の発想がなければ、新局の設立は、琉球放送にもQABにも何のメリットもないものでした。テレビ朝日は沖繩に独自の局を作ろうとしていましたが、われわれはまずそれを思い止まってくれるよう交渉に入りました。

併行して琉球放送の小禄会長(当時社長)は郵政省に「われわれが全責任を持つ、人も出す、機器も出す、金も出す」と交渉し、それこそ膝詰め談判で、粘り強い折衝を展開するのです。1局2波の障害となる問題を一つひとつクリアするために、郵政省の事務所で弁当を食べる間も惜しんで、夜中まで細かい法律的な詰めをしたと聞かされました。

4局化の方針が打ち出されてから開局まで、長い戦いが続きました。

とにかく全国でも例のない、見たこともないものを立ち上げるわけですから、何から何まで暗中模索でした。小禄会長には、ご本人にしかわからない開局までのご苦労があったと思います。これは琉球放送の命運をかけた一大プロジェクトで、私は事あるごとに小禄

会長のこと

を「琉球朝日放送の創業者」と言っています。

小禄会長は「全責任を持つ」と

明言しましたから、具体的になんか人を出すか、

どうお金を集めるかという戦いでもありました。

まず、7億円という資本金を県内で集めなくてはなりません。日本全体が大変厳しい経済状況下にあつて、中小企業の多い沖繩ではこの金集めは大変難しい作業でした。それでも、当初は10億円とか30億円という話を、交渉に交渉を重ねて、最終的に7億円で落ち着かせたという経緯があります。

なぜテレビ朝日系列か

新局に、なぜテレビ朝日の系列を選んだか、というところ、琉球放送の50年の歴史と深く係わっています。



2つのパラボラが見える社屋の全景

九州の各系列局でも同様に行われていたのですが、琉球放送は創立以来、数本のネット番組をテレビ朝日から受けていました。その他、番組制作の受注など、テレビ朝日との間に人的つながりや人脈があり、最終的に信頼関係が結ばれているということがこの局の立ち上げに大きく貢献したのだと考えます。

ところで琉球放送のキー局であるTBSはなぜ1局2波を許したか。ひとえにTBSと琉球放送の創業以来の信頼関係の賜物です。

もろもろの条件が整っていましたが、最後まで引っかけたのが報道協定でした。同じ建物の中に系列の異なる放送会社が存在する

というのはJNN協定に違反するのではという指摘がありました。

私は報道局長の経験がありましたので、何度もTBSに足を運び、「情報漏洩にならないから信頼してくれ」「JNN協定というのは精神条項であって、経営協定ではない」などと説明しました。

「情報が漏れるのではないか」、「ニュースや情報は同じ素材を使うのではないか」と言う疑心暗鬼をこうして一つひとつ払拭していきました。

実際、「建物の右上にQAB、左にRBCのマークをつけます」「パラボラアンテナも2つ建てます」「電話交換手も別々です」というように、郵政省からも徹底的に指導され、実行しました。

「君がやれ」突然の発令

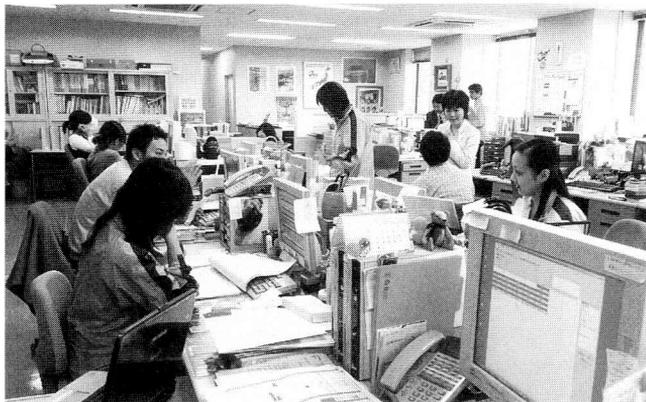
開局が間近に迫ると、人を送り出す琉球放送も大変でした。これまでの態勢を崩さないように、徐々に人間や機材を移していく必要があります。

「君がやれ」といわれたのは、忘れもしない開局の年の平成7年1月17日で、阪神大震災の日でした。本当にびっくりして、頭が真

っ白になりました。

最初に送り出されたのが専務取締役の私と営業局長の城田盛達で、翌2月に人事発令があり、琉球放送会館11階の仮事務所でスタートしました。

放送局を最初から立ち上げるということは困難の連続で、鉛筆一本から、ロゴマーク、営業のED PSにいたるまで手配しなくては行けないのですが、短期間でそれ



活気をうかがわせる営業局

が出来たのは、琉球放送で40年間の経験があったからで、ある程度は作業も早く進んだと自負しています。通常の新局立ち上げでも考えられず、無理だったと思います。テレビ朝日からの応援、指導にもスムーズに対応することができ、社内態勢を徐々に整えていきました。

QABの社風については、ステーション・シンボル(コーポレート・シンボル)にはつきり表現されています。特徴ある「Q」の部分に強いシンボル性を持たせました。

立体感のある「Q」の文字は、質の高い情報を発信していく舞台となるところの沖繩を中心とした地域の広がり、そこでの豊かな情報文化の活力を象徴しています。また、時代に対する真剣的確な「まなざし」を意味するとともにちょうどパラボラ・アンテナのように、休むことなく情報を発信し続けるQABの活力溢れる姿勢を表しています。

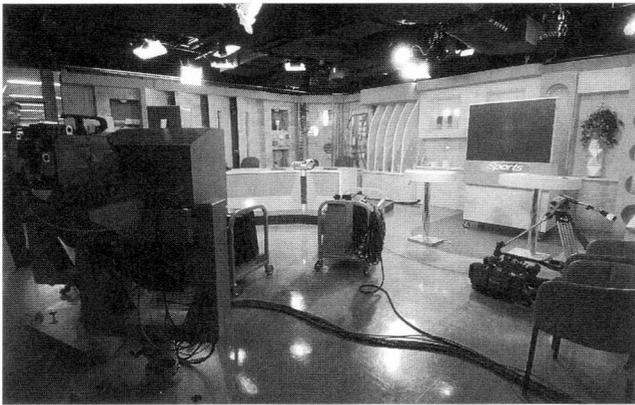
当初から強く打ち出したのは、限りなく1局2波に近い放送局を作ったけれど、系列は別であるということ。TBSがあって、テレ

び朝日がある。その系列の違いは視聴者にはつきり示さなくてははいけません。

ニュースキヤスターや、アナウンサーも、すべて新陣容としました。

すべてにおいてQAB独自のカラーを見せる、ということに苦心しました。

こうして沖縄における民放の第3波、テレビ朝日の全国23局目の



本番前のニュース・スタジオ

系列局が沖縄に誕生し、経済効果、情報の発信量ともに倍増したわけです。

いよいよ放送開始

思わぬ競争原理が

1995(平成7)年10月1日早朝、正式放送開始を前に火入れ式が行われました。QABテレビ

マスターにおいて、テレビ朝日の戸倉常務他ネットワーク関係者、琉球放送小禄社長(当時)以下の全役員、琉球トラストの全放送スタッフ等が見守る中、10秒前から全員でカウントダウンを行い、午前5時58分放送開始のスイッチに火が入り、オープニングがスタートして本放送を開始。

10月10日にはQAB開局特番として「琉球美島物語」を北海道テレビとの共同制作で全国放送を行いました。復元間もない沖縄の首里城を拠点に、札幌、大阪、名古屋、福岡を結ぶ多元生中継によるANB系列全国放送。テレビ朝日の渡辺宣嗣アナウンサーと、地元沖縄出身のタレント早坂好恵を司会に、ゲスト歌手としては、沖縄からは伊藤多喜雄バンドが番組に

花を添えました。

翌1996年の1周年の年には、朝日新聞社・琉球朝日放送主催で「第21期囲碁名人戦」(武宮正樹名人vs趙治勲棋聖・本因坊)を催し県内囲碁ファンを喜ばせました。また思いがけず、蓋を開けてみると非常に面白い現象が生まれています。

競争原理が働き、例えば、QABへ出向した社員は、琉球放送の社員には負けまいと頑張りました。それは琉球放送に残った社員も同様だと思えます。創業から10年が経過して、QABは少ない人数ながら(現在出向社員は34人)、報道番組、特番などで非常に充実した番組を作っています。

開局の日から今日までのことが昨日のことにように憶い出されま

新局ならではの活気が

思わぬ結果を出す

報道、制作面で年々力をつける一例に、これまでの受賞番組の一部を紹介します。報道では、

◆「ステーションQ―検証・動かぬ基地」が2005年度の第42回ギャラクシー賞報道活動部門優秀

賞受賞。

◆「検証・動かぬ基地拡大版」沖国大ヘリ墜落事故から1ヶ月」が2005年度第5回ANNものがづくりネットワーク大賞最優秀賞受賞。

◆「検証・那覇空港小象失踪事件」が2004年度放送文化基金ミニ番組コンテスト優秀賞受賞。

◆「メディアの敗北」沖繩返還をめぐる密約と12日間の戦い」が2003年度日本ジャーナリスト会議JCI賞及び地方の時代映像祭コンクール審査員会推奨。

等々。新設の放送局ならではの活気と旺盛な取材意欲が功を奏したとでもいえますでしょうか。

一方、制作部門も負けてはいません。

1997(平成9)年1月は「超古代文明は琉球弧にあった!」が与那国海底遺跡(構造物)を取り挙げテレビ朝日系列九州・山口ブロックで同時ネット放送、これが反響を呼び、他の11局に番組販売するにいたしました。この番組は「国際海洋映像祭特別賞」を受賞しました。

また、レギュラーニュース番組の中の特集コーナー「リュウキユ

ウの自然」も地域に根ざした情報番組として好評で、視聴者からの要望により「奇跡の森」亜熱帯沖縄・やんばるの自然」としDVD化、先の海底遺跡も「地域のカタログ・沖縄の海底遺跡」としてDVD化発売、好評な売れゆきを見せています。

いずれにせよ発足してまだわずかな放送局のスタッフが一丸となつてものづくりに励んだのは、ゼロからのスタート、小人数による精鋭主義が良い結果をもたらしたものであろうかと分析したこともあります。後発局のハンディを逆転の発想で乗り越えようと絶えず局員同志励ましあったことも事実です。

しかし、喜んでばかりもおれません。放送の命でもあるコンテンツは無限です。ジャーナリストとしての触角、クリエイターとしての感性は日々刻々と磨かねばならないことは申すまでもありません。

開局10年デジタル化にも

有利な1局2波

QABが発足して10年。十年一昔とは言いますが、その間には国内はもとより世界的な大きな変動

がありました。CSデジタル放送開始(1996年)、続々開局するコミュニティFM放送、2000年コンピュータ誤作動問題、BS放送のデジタル化、地上デジタルテレビジョン放送は東、阪、名だけでなく地方でも前倒しでスタートしています。放送界を取り巻く環境は刻々と変化しています。そしていよいよQABもデジタル時代を迎えます。

今後は、デジタル化でなおさら



整然としたマスター室

1局2波のよさが發揮できるものと確信しています。デジタル化の際には、一般にはローカル局で30〜40億円の費用がかかりますが、1局2波の形ですと、設備費用が少なくてすみます。まさにデジタル化対策としてQABが誕生したのだと実感しています。

人件費の面からも、仮にQABにいる出向社員が引き上げると、琉球放送の経営シミュレーションは成り立ちません。ですから、琉球放送から見ると、理想的な形で経営の効率化が実現したわけです。琉球放送の社員はQABの存在に感謝しなければならぬし、QABも琉球放送があつてこそそのわれわれだと考えなくては…。

社会的には情報多チャンネル化、多様化という目的にも合致しており、1局2波は非常に確な経営判断だったと感心するばかりです。小緑会長は、琉球放送の歴史に大きな足跡を残されました。

50年という歴史には重みがあり、創業者の座安盛徳氏をはじめ先輩諸氏のご尽力には感謝するばかりです。

QABもお蔭様で今年の10月で創立10周年を迎えることができま



情報発信の中枢、報道制作局

した。

顧みますと、琉球放送の創業時に活躍された諸先輩の姿が思い起こされて、「もつと苦勞されたんだろうなあ」と感無量の今日この頃です。

これからもQABは未来に向かって役員一同邁進する覚悟です。放送事業に目に見える形で、必ずや1局2波のメディアの存在感を示そうと、日夜奮闘していると